

末黒野

すぐろの

5月号

(通巻909号)



丈三寸

森清堯

明眸のしかと語りぬ大マスク
焼芋を売るや老舗の果物屋
革手袋明日の上着へ移しけり
冬雲を押し返さむと今朝の富士
わたつみの闇を深むるどんどかな
膨らめる綺羅の葉先や霜雫
水仙の丈三寸の気概かな
臘梅や朝の明るき法の庭
涸川を渡るごろ石避けながら
子の声につぐ犬のこゑ鬼やらひ
寒明けの一声高き鴉声かな
見上ぐれば命びつしり辛夷の芽

善隣

岡野里子

飛石や中洲の松の雪囲
雪掻きて善隣近き朝かな
残りたる梢のひと葉寒の鴟
土遊びの児の息弾み春隣
春立つや縁に揃ひの小座布団
古井戸の堅く閉ざされ牡丹の芽
茅葺の倉の白壁春日燦
豪農の竈や背戸の春菜畑
紅梅や兜造りの蔵の屋根
竹林の奥ゆ小綬鶏忘れ井戸
葦垣の旧りたる数寄屋白椿
生垣や覗く隣家の浮かれ猫

薄氷

黒滝志麻子

(顧問)

鳥発つや中洲に残る雪の花
 備長の音の乾きや鱒を焼く
 道草の園児や叩く薄氷
 保養所の屋根の茅葺き物芽出づ
 棚田よりすべりくる風鼓草
 菖蒲の芽一寸ほどに尖り立つ
 芽吹き初む千年銀杏雲一朵
 いち早く野にきし春や子等の声

甲矢集

野水仙

菅野日出子

凍雲を抜けて燃え立つ落暉かな
 寒満月樹齡重ねし櫳越えて
 小流れに透くる魚影や野水仙
 塵一つなき山門や冬木の芽
 風に鳴る絵馬を鎮めて冬日差
 抜け道の階くづれいぬふぐり
 玄関に杖置く暮し日脚伸ぶ
 寒明けや腰痛癒ゆる気配なく
 長屋門入るや白梅五六輪
 シャーベットの道へ足跡冴返る

改名

田中臥石

聖菓食みこぼす入院確かなり
 人工透析液と血管冬日透く
 少女めく配膳係四温晴
 星に夢を托して冬を痛み抜けり
 立春の麴の匂ふ蔵の径
 春の雪降るや青木重行忌
 臥石改名せよと清水基吉云ふ春の雪

波郷の主治医、川畑火川の医宅にての小句会での笑
 談であった。主席者は、清水基吉、川畑火川（波郷の
 主治医）、山田みづえ、細川加賀、小林廉治、小坂順
 子の諸氏である。いづれも鶴の同人会の流れである。

凍雲

森清信子

束の間の空を囃して冬落暉
杣道の乾ききつたる落葉かな
昼月を呑み凍雲の動かざり
竹林に寒の棲みつく寺領かな
山里に入るや臘梅匂ひたる
闇下りて灯る山家や霜囲
頼らるることは幸せ室の花
三人の子の臍の緒や卵酒
寒紅梅撫牛の目のくりくりと
浅春の影置き宮の百度石

冬牡丹

石黒興平

竹爆ずる音やどんどの明るさに
着せ藁にをさまりきらず寒牡丹
谷戸渡る風のやさしさ冬木立
隣家の猫と目の合ひ日向ぼこ
緋袴の巫女の小走り冬牡丹
探梅や指で拵ぐるスマホ地図
内視鏡の順待つ廊の寒さかな
待春やおろしたてなるスニーカー
ひかり増す明けの明星春隣
春潮の浮棧橋の軋みかな

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



鱒東風 長尾タイ

竹馬の揺らぐ五六歩風やはし
小雪舞ふ止まぬ懐郷母の影
亀鳴くや黙なる兄と一日旅
日脚伸び米寿の姉の長電話
鱒東風波を逆手の真帆片帆
雲梯を渡る親子や風光る
蝌蚪の国覗く園児の膝の泥

寒の朝 高木邦雄

梅二月 今村千年

十キロ余友と走破や寒の朝
日脚伸び匂会帰りの茜雲
探梅の疲れ消え行く足湯かな
炒りたての豆を一口鬼やらふ
春濤の響動もす岬朝日影
手水舎の龍吐く水のややぬくし
春の雪音なく垂る寺の屋根

いぬふぐりきのふと違ふけふの徑
梅咲きて姿整ふ長屋門
梅二月三溪園に四花咲きて
春めくや大池渡る風の音
白梅や遙かに遠く白き富士
春満月クイーンの塔のそのうへに
蜂の巣や子はそれぞれに部屋を持ち

春の宵

大川暉美

風生まれひとひらひらり寒牡丹
稜線の隈なき火色寒落暉
強東風や谷戸の空掃く竹百幹
早春や海に溶けゐる空の色
ほつほつと畦の息吹や露の臺
宮の樹の透けて日の斑や春の風
良き音色タクトにのせて春の宵

春帽子

太田良一

散策の伸ぶる歩幅や寒の明
溪谷に生まるるこだま春立てり
笹竹の葉擦れの音や春立ちぬ
源平の池を陣地に亀鳴けり
海沿ひの迂路の旧道春帽子
山畑へ鋏のひと振り土匂ふ
転びたる両手の掴む春野かな

ミモザ濃し

岡田史女

春水の走り出したたり稲荷山
亭々と曙杉や春の雲
三回目のワクチン接種冴返る
如月の海へ迫り出づ高架線
ミモザ濃し十字架高き丘の上
奉仕てふ人ら集ひぬ沈丁花
木瓜咲いて通院の足よるめけり

初

鴉

小田嶋野笛

叩き売る数へ日の蛸足足らず
寒禽や硝子のごとき朝の風
入り乱るる縞のジャージや冬日影
すこやかなる糞放りたまふ初鴉
わざをぎの見得の大手や初芝居
一羽来て三羽を呼びぬ寒雀
一輪の笑むや探梅満ち足りて

冬

昴

加藤静江

寒暁のきりりと晴れて薄茜
船笛のかすかに届き冬昴
冠木門入るや明るく雪の花
純白の倉壁の裾龍の玉
青空の碧極まれり寒土用
寒椿岩すべる水細りけり
春立つや水脈鮮やかに出航す



青炎集

森清

堯選



横浜 木下 晃

手焙を横や臨書の墨すりて
暁へ向く深呼吸春立ちぬ
露の曇黒土の上何もなし
碇泊を終ふる巨船や春動く
孫受験手水所へまづの礼
船ばたに踊る大鯛春の潮

横浜 小嶋 紘一

朝まだき冬の満月ほつこりと
正月や酒の相手は下戸の婿
紅一輪ひかりと化せり寒椿
病室の名札とりさり春立つ日
不退寺の業平像や古都余寒
川沿ひの日の斑風の斑猫柳

横浜 根本 公子

縫初や針穴通る未知の風
行き会つてたちまち交ざり鴨の陣
寒弾く園児らの声桜の芽
立春の波押し上ぐる光かな
春の猫野火立つ如く跳び上り
恋猫の紐解くやうに飛び降りぬ

横浜 上野 静子

朝に日に光る蜜柑や丘の畑
雨あとの庭のきはやか青木の実
約束の友の上京寒四郎
炊立てに割る寒卵黄身重き
春立ちて鈍色の雲去りにけり
強東風や夕映えの川ほむらだち

町田 伴 秋草

底冷の朝の開扉や東寺の塔
洗顔や身の引き締まる寒の水
猫の背のゆるき起伏やひなたぼこ
削れざるちびし鉛筆春近し
東風未だ吹かぬに暦春立てり
淡雪や黒き車を化粧して

横浜 高橋 正江

声変りなる少年の御慶かな
降る雪や街の喧騒打ち消して
境内の日溜りに群れ水仙花
寒夕焼一番星の瞬きて
臘梅の艶めく色や朝日影
春の日や窓辺に戯るる猫二匹

横浜 東小園美千代

山間の集落の灯や衾雪
古民家の田の字の間取り隙間風
凶書室の窓辺ぬくぬく冬日影
中天の富士の嶺仰ぐ梅の里
梅東風の丘の鉄塔ちぎれ雲
早春賦を口遊ぶ姉猫柳

横浜 岡美 智子

思ひきり吹きかくる息悴む手
日の沈む方へ向かひて冬鷗
たまに降り積もりうきうき雪つなぎ
雨音のリズム速まり春隣
庭せせる二羽の山鳩春隣
口紅を買うてそのまままた春も

横浜 本間せつ子

初日さす厨や新の割烹着
揚々と空に舞ひたる木の葉かな
冬怒濤岩礁呑んでしまひけり
貼り紙の廃業の文字冬ざるる
春風や帰宅途中の缶ジュース
春眠や乳首離さぬ赤ん坊

狭山 沼崎 千枝

ストーブや十本の手の皺自慢
大寒や背骨の軋むストレッチ
踏切を越えて寒月通夜の黙
待春や雄猫の首長く伸び
春節やランタン赤き媽祖の廟
菜園に元肥入るる雨水かな

耕 土 集

岡野 里子 選



いざ始めむ五年日記のその厚さ
菜の花の波や彼方の富士堂々
臘梅の甘き誘ひや尼の寺
剪定の地下足袋空へ登るかに
記念にともらひて重し君子蘭

横浜 内山 みち

筆の花戦後の卓に幾そ度
砂浜にくねりて蜷の恋の道
朝なさな水差す壺やすみれ摘み
梅東風のいたづらにとぶ帽子かな
風信子の高さの風や紅の風

横浜 佐々木澄子

立春や老いをぬぎ捨て地図の中
受験子を惑はす雪の予報かな
藪椿ぼとりぼとりと無縁塚
梅の香や尖る空気を和ませて
春泥に苦戦や新のスニーカー

横浜 喜田 君江

オリオンを見つけたる君輝けり
亡き父の火振りかまくらほつかぶり
白梅や逢ひたき母の浮びたる
乳飲み子の甘き匂ひや春キャベツ
福豆や前歯なき子の発表会

狭山 小林 友子

薄氷の雫のひかり掌の光り
老梅の門番のごと家守る
Vサイン園児見つくる露のたう
下萌てふ茶の湯の菓子や露のたう
新調の上着一枚雪解光

横浜 梅津まり子

雑木の芽アップダウンの谷戸の底
刺抜きを指に滑らす余寒かな
新調のスノーブーツや春の雪
間欠泉の硫黄微かや藪椿
残業や節分の夜の恵方巻

横浜 平田 きみ

日溜りの池の辺りや冬菫
華やぐやポインセチアの飾り窓
朝の烟灰かに青き霜柱
朝の日の街路の木木や垂り雪
三つ揃ひ成人の日の男の子たち

横浜 杉山くみ子

公園に人影疎ら春遅し
うららかや散歩の犬の赤き服
のどけしやラジオより聴くビバルディ
亡き姉の今も居るやう春の夢
美しく老ゆる人ぬて名の木の芽

横浜 毛利 直子

せはしなく会釈かはして日短し
祝会やポインセチアの赤燃ゆる
オーケストラに合唱響き師走の夜
冬ぬくし旅の絵本の淡き色
元朝の目覚めの早し椀並べ

横浜 北野 節子

林間の霧氷の放つ光りかな
枯木立風鳴り抜けて人里へ
雪残る熊笹の中登る道
二百年の臥竜の梅やちらほらと
朝の日の芹の香満つる厨かな

狭山 谷安喜美子

鉢植糸に牡蠣殻並べ滋養とす
探梅や行き着く川の鷺一羽
初富士やフロントガラスはみ出して
朝日影枝に鳥来てしづり雪
遅咲きの梅の蕾や色見せて

横浜 村田 敦子

診察の待合室や外は雪
減量難し鏡開きの汁粉
仏壇の花にそそぎぬ寒の水
夕暮れの運河パークや冬灯
冬の月高きビル群見下ろせり

横浜 玉川 利江

薄紅に染まる東雲寒の街
凍滝や音もろともに閉ぢ込めて
梅が香に誘はる今日の散歩道
日溜りに手すり足すり冬の蠅
店頭の捨て値の暦二月尽

横浜 森川 享

眠れぬ夜ホットワインを少しだけ
だるま一つ買うて帰りぬ初大師
見上ぐるや早春の鳶ゆうゆうと
産土の杜や紅梅ほつぽつと
梅の香や足止めてなほ近づきて

横浜 津野 桂子